

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：34302

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01300

研究課題名(和文) イスパノアジアとしてのフィリピン諸島：物質資料と文献資料によるメキシコとの比較史

研究課題名(英文) The Philippine Islands as Hispano-Asia: A Comparative History with Mexico Using Material and Literary Sources

研究代表者

立岩 礼子 (Tateiwa, Reiko)

京都外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：80321058

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アジア的環境の中で生じたフィリピン諸島のイスパノ化が、メキシコの場合とはどう類似し、どう異なるのかについて、物質資料と文字資料の両面から解明することを試みた。従来の研究では銀や絹が目目されてきたが、両地域でも実るココナッツ、メキシコ発祥でスペインやフィリピン諸島で飲まれたチョコレートを注ぐカップ、石材の建築がない後者に建てられた教会、布教のための書物を出版する印刷技術などを分析し、フィリピン諸島でのイスパノ化がメキシコとは異なり、受容の形態も決して一様ではなく、媒介者も様々であることを確認した。しかし、資料の欠損やコロナ禍の制約で、媒介者や翻案プロセスの解明には課題が残った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、従来は個別に研究されてきたメキシコのイスパノ化とフィリピン諸島のイスパノ化を比較して分析したことにある。フィリピン諸島は政治的にはヌエバ・エスパーニャ副王領の統治下にあったが、イスパノ化は宗主国から植民地への一方通行ではなかった。メキシコの場合は、スペインからもたらされたモノや情報や技術を先住民が自ら取捨選択して翻案した形跡が認められるが、フィリピン諸島の場合は、イスパノ化の対象地域が限定的である上、インドやイスラームの影響に加え、華人やポルトガル人の交易圏とも重なり、多様な翻案ルートが存在し、そのルートはモノや技術によって異なっていたということを解明した。

研究成果の概要(英文)：This study attempted to elucidate from both material and textual sources how the hispanization of the Philippine Islands, which occurred in an Asian-like environment, was similar to and different from the case of Mexico. The main objects of analysis were crops, represented by coconuts, which grew in areas with similar climatic environments, chocolate-drinking cups invented by a viceroy of Mexico and imported partly from Japan, church buildings that served as important centers for preaching Christian doctrines, and technology for printing church-related books. The analysis confirms that hispanization in the Philippine Islands proceeded in a different manner from that in Mexico, and that the forms of reception were by no means uniform, and that the mediators were also varied. However, due to the limitations of the data and the pandemic, the identification of the mediators and the process of the adaptation remained unsatisfactory.

研究分野：歴史学

キーワード：イスパノ化 イスパノアジア フィリピン諸島 メキシコ ココナッツ チョコレートカップ 教会建築 印刷技術

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

グローバルヒストリーへの関心の高まりから、国内外におけるフィリピン諸島史の研究成果は増加してきた。その1つはメキシコ-フィリピン関係史の深化であり、例えば T. Seijas 著 *Asian Slaves in Colonial Mexico* (2014) や E. M. Mehl 著 *Forced Migration in the Spanish Pacific World* (2016) が、アジアやメキシコの住民が労働力として強制的に太平洋を横断させられたことを分析し、両地域の交換がモノにはとどまらないことを明らかにした。もう1つは、メキシコにおけるアジア製品(屏風、繊維製品、陶磁器など)の作り直しや現地生産化に関する理解であり、D. Carr 著 *Made in the Americas: The New World Discovers Asia* (2015) のように物質資料に依拠した分析により、交換にとどまらない現地化のプロセスへの関心が強まった。しかし、アジアをフィールドとする研究ではメキシコ由来の産物の現地生産化についての研究は進んでいなかった。一方、フィリピン諸島研究では社会史や社会人類学の研究の進展により、キリスト教信仰の特徴やタバコなどの事物の利用法が明らかにされてきた。その結果、フィリピンの文化的表現は、他の東南アジア地域と比較して相違点があることも理解されるようになった。

そこで、メキシコ植民地史の研究成果を参照することで、こうしたフィリピン諸島の特質についての理解が一層進むとの見通しを立て、本研究の端緒となった2013年度採択~2015年度挑戦的萌芽研究「東西交流史の新たな視角：メキシコ史研究から見る東・東南アジアの文化変容」(代表：宮原暁)であった。メキシコ植民地史の知見が、フィリピン諸島のイスパノ化の理解に有効性を持つという実感のみならず、フィリピン諸島とメキシコではそのプロセスに相違点もあることを確認し、この違いが生じる原因の究明には、フィリピン諸島を取り巻く周辺地域との関係を射程に入れた研究の成果も踏まえて理解することが不可欠であるとの認識を共有した。

2. 研究の目的

本研究の核心となる問いは、「アジア的環境の中で生じたフィリピン諸島のイスパノ化は、メキシコの場合とはどう類似し、どう異なるのか」である。アジア地域において唯一のスペイン領であったフィリピン諸島で生じたイスパノ化のプロセスが、メキシコの場合とどう類似し、どう異なるのかを検討した。そうすることで、フィリピン諸島における信仰と物質文化が、スペイン統治下で多様な担い手によって取捨選択あるいは翻案、受容されるプロセスを物質資料と文字資料の両面から解明できると考えたからである。その際に、スペイン人と現地住民だけでなく、商人から奴隷まで交易ルートを紹介して往来する者たちによる複雑な関係の中で植民地構築のプロセスを捉え直すメキシコ植民地史研究の新潮流の知見を援用し、フィリピン諸島の場合を分析し、スペイン型植民地支配の特質を地域間比較の枠組において明らかにする試みでもあった。

3. 研究の方法

本研究では、スペイン領フィリピンにおける文化混淆プロセスの解明にあたり、メキシコとフィリピン両地域を対象とし、メキシコとフィリピンの文字資料を扱う歴史学者と物質資料の専門家との協働を図り、メキシコ、スペイン、フィリピンなどで資料などの実地検分を実施した。具体的には、以下の3段階の手順を踏んだ。(1)メキシコとフィリピンの文化混淆に関する研究動向の共有を行った。(2)個々の事物について、メキシコ側とフィリピン側の研究者が一組となって、文字・非文字資料を読解できる班を作り、事例研究を行った。(3)個別の事例研究の成果を研究組織全体で共有・討議した。協働によって、知見の交換や互いの学びを深め、フィリピン諸島の歴史的特質を捉えることを可能にした。

4. 研究成果

本研究で得た成果をまとめると、次の通りである。

(1) 宗教・信仰

メキシコにおいては、スペイン本国の聖職者が導入したローマ・カトリシズムや教会制度が、社会の多民族な実情に即して変更されていった。このメキシコの事例を参照し、フィリピン諸島の場合を検討した。

スペイン統治下、首都マニラの中心は、城壁に囲まれたスペイン人居留区「イントラムロス Intramuros」であった。メキシコを征服したスペイン人は、区画整理した広いスペースを確保して新しい都市の形を示したのに対し、フィリピンでは区画整理はしたものの陵堡で囲った要塞都市を築いたのであった。海から攻めてくるモーロ人(現在のインドネシアにいたイスラム教徒)、日本人の海賊、華人、イギリス軍などに対する防備を固める必要があったのだ。スペイン人が入植した当時、教会は、モルガの記述や当時の地図から、当初は高温多湿な地域に特有の高床式で、「軽い材料」つまり植物を編んだ壁で作られたことがわかっている。スペインやメキシコのように石を使って建造物を建てるには、石材を探さなければならなかった。セブ島やイロコ州では、石の代わりに、サンゴ石が多く流用されていた。これは、メキシコのベラクルス州のホルテスが最初に造った建築物にも認められた。現地の伝統にしたがって、竹とヤシの葉による高床式の建物が建設されたが、1583年に火災に見舞われた。耐久性のある建材を求めて、スペイ

ン人たちはバシグ川の上流へとのもり、火山岩を調達した。そして先住民に石積みの建築技法を教え、イントラムロスを石造りの都市に作り替えたのである。しかし、1645年の大地震によって都市は瓦礫と化した。都市の復興と防衛は、建築技法の改善と向上とともにあった。

(2) 技術・意匠

スペインから持ち込まれた技術や意匠が、現地住民社会やアジアからの流入民の影響で変容し、やがて独自の表現が発達した。この成果を参照しつつ、フィリピン諸島における独自表現の生成を検討した。

印刷技術の場合は、宗教関連の出版を促進する目的として導入されたものである。メキシコと異なるのは、フィリピン諸島には、活字にしる、紙にしる、インクにしる、すでに中国の唐代からの印刷技術に親しんでいたという点で特徴的であった。

また、建材という点では、メキシコではもともと先住民がアドベ（砂、砂質粘土とわらまたは他の有機素材で構成された天然建材）を使い、その後日干しレンガを製造するようになった。フィリピン諸島では、修道士たちがこのアドベつくりを導入したようで、卵と土を混ぜて建材にした。その後、フィリピンでは日干しレンガの生産が始まり、輸出産業にまで成長した。

(3) モノ

メキシコでの利用法について確認したうえで、メキシコ由来品のフィリピン諸島での流通や利用に関する記述がある資料を収集し、整理した上で、表にまとめた。その一部を表1としてここに開示する。（表1参照）。

表1：メキシコ由来品のフィリピン諸島での流通や利用

分析対象	起源 From	受容先 To	伝達ルート	媒介者	伝達は偶然か、意図的か	翻案の有無
アドベ製造	墨	比	ガレオン船	修道士	意図的	有（卵を使った）
石材の使用	西・墨	比	ガレオン船	スペイン総督	意図的	有（珊瑚石の流用） 無（現地で調達）
活版印刷	中	比	?	華人	?	有？（アルファベット文字の追加？）
	甫	比	ゴア経由	イエズス会	意図的	無
	墨	比	ガレオン船	クロムベルガー？	意図的	無
紙	中	比	?	?	意図的	無
	西墨	比	ガレオン船	役人	意図的	無
インク	中	比	?	?	意図的	無
	比	比	自生	?	?	無
ココナッツ	比	墨	ガレオン船	船員	偶然	無
トゥバ（ココナッツ酒）	比	墨	ガレオン船	フィリピーノ（インディオス・チノ）	偶然	有
チョコレートカップ（磁器）	中・日	西・墨・比	ガレオン船（1630～1640）	商人	意図的	無（注文生産）

注：表中に使われている漢字は国名を表す。墨 = メキシコ（ヌエバ・エスパーニャ）、比 = フィリピン諸島、西 = スペイン、中 = 中国、甫 = ポルトガル、日 = 日本（表の登場順）。

以上については、最終報告会を実施し（2023年3月30日、於：京都外国語大学）し、ホセ・ベルサレス教授（フィリピン、サン・カルロス大学）から評価を受け、最終報告書を作成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 野上建紀・エラディオ テレロス エスピノサ	4. 巻 6
2. 論文標題 「グアダラハラ陶磁器」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『多文化社会研究』	6. 最初と最後の頁 141-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮原暁	4. 巻 17
2. 論文標題 「語ることでできない「真ん中」—小説『骨』とディアスポリック・チャイニーズの時間」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『華僑華人研究』	6. 最初と最後の頁 7-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野上建紀	4. 巻 911
2. 論文標題 「もう一つの東西文化交流路—マニラ・ガレオン貿易」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『歴史地理教育』	6. 最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立岩礼子	4. 巻 1
2. 論文標題 「スペイン帝国下における印刷技術の伝達」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『IELAK Publication Series』	6. 最初と最後の頁 41-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮原暁	4. 巻 18
2. 論文標題 「ソウルフード以前 フィリピン諸島と福建の間のディアスポリック・チャイニーズの日常的な食」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『華僑華人研究』	6. 最初と最後の頁 113-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮原暁	4. 巻 111
2. 論文標題 「エクチュールと声の間 福建省晋江僑批の多声的解釈」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 黄滢・山本博之(編)『東南アジアのナショナリズムと華人「同化」の実像』	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水俊彦・宮原暁	4. 巻 1
2. 論文標題 「イメージング分光による新しい文化財調査アプローチ - 破片から「文化財」へ」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『OPTRONICS』	6. 最初と最後の頁 52-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Carmen Bettina Silao BULAONG, Juan Ramon JIMENEZ VERDEJO	4. 巻 88
2. 論文標題 THE BERMEJO WATCHTOWERS BUILT IN SOUTHEASTERN CEBU, PHILIPPINES DURING THE SPANISH COLONIAL PERIOD	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『日本建築学会計画系論文集』	6. 最初と最後の頁 752-758
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 菅谷成子
2. 発表標題 「メキシコ実地調査報告 フィリピンのイスパノ化過程の比較検討に関連して」
3. 学会等名 第36回四国東洋学研究者会議
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野上建紀
2. 発表標題 「『出島』から伝わった肥前陶磁」
3. 学会等名 長崎県考古学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MIYABARA, Gyo
2. 発表標題 “ASEAN Identity and Sinicization: Focusing on the Filipino-Chinese Inter-Ethnic Relationship.”
3. 学会等名 St. Andrew's-IIR Workshop on the New Dynamics of Political Economy in Southeast Asia (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮原暁 菅谷成子
2. 発表標題 「ソウルフード以前 カモテは食べたことがない」
3. 学会等名 日本華僑華人学会2020年度研究大会開催校企画セミナー「華人めし」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野上建紀
2. 発表標題 「ガレオン船で新大陸に運ばれた陶磁器」
3. 学会等名 第272回東南アジア考古学会例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 立岩礼子
2. 発表標題 「コルテスのアジア貿易への関心」
3. 学会等名 第20回ラテンアメリカ研究講座 「メキシコの征服者コルテス像の再考=歴史学の観点から」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 INOUE, Yukitaka
2. 発表標題 La presencia de Japon y Asia en las fuentes indigenas novohispanas
3. 学会等名 Simposio internacional "Japon y el mundo hispanico a traves de la ruta transpacifica: siglos XVI y XVII" (Mexico) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 野上建紀	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 324
3. 書名 鈴木英明(編著) 『東アジア海域から眺望する世界史』 「太平洋を渡ったチョコレートカップ」	

1. 著者名 菅谷成子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 318
3. 書名 安村直己（責任編集）『南北アメリカ大陸～17世紀』 「スペインによるフィリピン統治」	

1. 著者名 立岩礼子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 307
3. 書名 谷口智子（編著）『タキ・オンコイ 踊る病ー植民地ペルーにおけるシャーマニズム、鉱山労働、水銀汚染』 「スペイン帝国下のアルマデン水銀鉱山 その歴史と水銀中毒」	

1. 著者名 伏見岳志	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 345
3. 書名 遠藤泰生・小田悠生（編）『アメリカの歴史と文化』 「ラテンアメリカと新世界」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	ヒメネス ホアンラモン (Jimenez Juan Ramon) (10525281)	滋賀県立大学・環境科学部・准教授 (24201)	
研究分担者	井上 幸孝 (Inoue Yukitaka) (20399075)	専修大学・国際コミュニケーション学部・教授 (32634)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野上 建紀 (Nogami Takenori) (60722030)	長崎大学・多文化社会学部・教授 (17301)	
研究分担者	宮原 暁 (Miyabara Gyo) (70294171)	大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・教授 (14401)	
研究分担者	伏見 岳志 (Fushimi Takesi) (70376581)	慶應義塾大学・商学部（日吉）・教授 (32612)	
研究分担者	菅谷 成子 (Sugaya Nariko) (90202126)	愛媛大学・法文学部・教授 (16301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関